http://commonf.net　E-Mail:jimukyoku@commonf.net

茅風

Breeze from the field of thatch-grass

2025年3月12日
森林塾青水
事務局便り
茅風通信 74号

曳き出した茅ボッチの前で(11月24日) 撮影:清水 英毅

目　次

■ 10月中旬～3月初旬の活動報告(事務局)……1
■ 2023定例活動⑥……2
「茅刈り」
◆開催報告(尾島　キヨ子)
◇感想文(大杉晟、石瀬愛夏)
■ 2023 定例活動⑦……4
「茅出し・山の口終い」
◆開催報告(藤岡　和子)
◇感想文(丸山　あさひ)
■ 麗澤中学校奥利根水源の森フィールドワーク……5
◆開催報告(飯村　孝文)
■ 流域連携活動報告……7
「小貝川の野焼き」「菅生沼の野焼き」
◆参加報告(稲　貴夫)
□ 社会貢献者表彰受賞……8
◆参加報告(草野　洋)
■ 藤原だより(北山　郁人)……9
□ 森林塾青水 20 周年記念事業について……9
■ こもんずの広場(川端　英雄)……10
編集後記

2024.10 中旬～2025.3 初旬の活動報告

【１０月】

● ２３日　麗澤中学１年生１６１名による奥利根水源の森フィールドワークを実施。青水関係者１８名がインストラクターとして指導にあたる。当日は雨天のため、急遽茅刈りに代わり、自然の素材を利用した工作に変更して実施した。

● ２６、２７日「茅刈り」実施。３９名が参加。合計１６６ボッチ（８３０束）の成果。１日目夜の車座講座は、清水、草野、北山の歴代塾長が青水２０年の歩みを語った。

● ２７日～　定例プログラム終了から１１月４日までの間、有志６名が茅刈り合宿実施する。この他、１１月中頃までの間に、地元茅刈衆及び自伐林業グループが随時、茅刈を実施。

【１１月】

● ２３日、２４日　「茅出し・山の口終い」実施。茅１６名が参加。合計８３４ボッチ(４，１７０束)を搬出した。

【１２月】

● １日　日本茅葺き文化協会主催の国選定保存技術「茅葺」保存団体認定祝賀会が京都で開かれ、稲事務局長が出席した。

● １日～２日　森林塾青水が社会貢献支援財団より社会貢献表彰。帝国ホテルで開催された授賞式に、清水・草野・北山・藤岡(和)の新旧塾長、副塾長４名が出席。

● １８日　『茅風』７３号発行

【１月】

● ２５日　流域連携の一環として、小貝川の野焼きに１１名参加。雨天のため火入れは延期し、防火帯の作業のみ実施。

● ２６日　同じく流域連携として、菅生沼の野焼きに１１名参加。

【２月】

● １日　一週間延期となった小貝川の野焼きに、青水より３名が参加。この日は天候の恵まれ、予定通り実施できた。

● ５日　月夜野カルチャーセンターで開催されたみなかみ町環境学習発表会(小学生)で、青水の活動紹介パネルを展示

【３月】

● ８日、９日　「雪原トレッキングと自然体験」実施。２５名参加。(詳細は次号で報告)

■2024定例活動⑥「茅刈り」
–茅刈りも、段々辛くなりにけり–

報告　尾島　キヨ子

森林塾青水の大きな作業の一つが茅刈りです。もう一つの大きな作業の野焼きから約半年が経ち、ススキの穂は２メートル以上の高さでフワフワと揺れていました。ただ今年は、例年と比べるとまだ葉の青さが残っています。(写真・下)

上ノ原の茅は、関東一円の寺社等の葺き替えに用いられます。また、東日本大震災の際は、福島に建てられた仮設住宅の断熱材にも使われました。そして、今年は、去年に続き茨城県の平沢官衙遺跡（国の史跡）で復元された正倉等の屋根の葺き替え用に送り出します。

青水で活動を始めた頃、『日本茅葺き文化協会』という団体があるのを知って、いったい何をやるのだろうと最初は驚きましたが、今は理解しました。茅場や茅葺き職人が減っても、寺社等の葺き替えの需要は続くので、茅の生産は大切なのです。近年、日本の『伝統建築工匠の技』がユネスコ無形文化遺産に登録されましたが､そこには材料を確保する『茅採取』も含まれています。大変、嬉しい事です。

今年の茅刈りには老若男女39名が参集しました。茅刈り講習では、地元の雲越萬枝さんが見本を見せてくれました。参加者はみんな、その様子をスマホに収めながら熱心に話に聞き入っていました。

講習が済むと、初心者はベテランの指導を受けながら、ボッチ作りに取り掛かります。まず茅を刈って径20㎝の茅束を５つ作ります｡それを１つに纏めてボッチにします。大切なのはゴミ（雑草）を入れない事と、束をギュッと結わく事です。これを徹底すれば、その後の作業もし易くなるのです。職人にとっても扱い易い茅になるのは勿論です。

上　お手本を披露する雲越萬枝さん

下　いつまでもご指導をお願いします

雑草の混じらない立派な茅束　　５束纏めて１ボッチに

みんな、みんな、思い思いの場所で刈っているのですが、茅で姿は見えません。私もここならと思う所で刈り始めます。そこは丈の高い丈夫そうな茅が多いのですが、雑草もあるので刈る前に除きます。雑草で特に難儀するのは高い茅に絡まった細い蔓です。それらは根元で切って上にしごいて取るのですが、背伸びしても最後まで手が届かず茅を曲げてようやくの時もあります。２日目は別の所で１ボッチを作りましたが、良い茅がまとまってあるよう見えたのにそうでもなく、１日目の場所に移動して昼までに４ボッチ出来ました。前日と合わせて計９ボッチです。

これでボッチ券が９枚手に入ります。ボッチ券は地域通貨で１枚200円に相当し、上ノ原での出張販売で地元産品が購入できる他、青水の活動参加費に使えます。昼食後も居残って作業をしたのですが、５ボッチまでは行きませんでした。

とても疲れました。参加したての十数年前は刈る時のザクッザクッという音がとても気持ち良く、癒される感じがしたのに、今は鎌を引くのにとても力が要ります。音もザクッザクッではなくなっている様に感じます。その頃は、地元の古老５、６名が指導をしてくださり、それぞれ自分の時間での茅刈りもされていましたが、今は茅刈衆が少なくなりました。そんなことから、青水では例会の他に、毎年有志数名で『茅刈り合宿』をしています。

必要な茅束の数は3,000束。合宿組も頑張っていますので、どうか皆さんも茅刈りに来てください！

感想文　六年ぶりの上ノ原で初めての茅刈り

大杉　晟

森林塾のイベントには 2018 年の野焼き以来の参加となりました。野焼きに参加したのだから、茅刈りまで参加しておかないとと思いながらも、コロナや日程の関係で久しぶりの参加となりました。

参加する前は稲刈りのように少しずつ刈っていくのかと思っていたのですが、抱える形で刈っていくやりかたでした。初めて見るものだったので興味深かったです。最初にお手本で、齢八十過ぎの名人が軽々と華麗な動きで刈っていく姿を見せてもらいました。

お手本だと簡単そうに刈っていくわけですが、実際に自分でやってみると勝手が全く違うので最初は大変でした。刈ろうと思ってもうまく鎌が入らないんですね。

ススキの穂先を目安におおむねこの辺だろうと思って刈り始めると、ススキ以外の雑草が思った以上にあって、これがなかなか鎌で切れない。1 ボッチどころか、1 束つくるのにも汗をかきながらやっていました。

それでも刈るのにはだんだんと慣れてくるのですが、刈った茅をまとめて立てるのが結構大変でした。最後までなれなかったと思います。コツはいい刈り場を見つけて、ちゃんと抱え刈りで茅を大きく一まとめにして一回で刈ることですね。ちょっとずつ稲刈りのように刈っていくと、立てた時にバラバラになって倒れてしまう。そんなこんなで 2 日間で 2 ボッチ立てるのが精一杯でした。

作業中に休憩がてら久しぶりに来た上ノ原をちょっとぶらぶらと歩いてみたのですが、通り抜ける風が心地よく、街中のような音がなく、虫の音と作業する音だけが聴こえてとても気持ち良かったです。

宿の食事ですが、量が多くてとても美味しいです。地元で獲れたイノシシや鯉のあらいが実に美味しかったです。

地元の農家の方が野菜をトラックいっぱいに乗せてやってきて、出張直売所を開いてくれました。いただいたボッチ券を使っての買い物は楽しかったです。全然ボッチを作れなかったので現金で支払った額の方が多かったですが。特に塩漬けわらびは初めて買ったものなんですけど、お薦めされたように、家で調理して焼きそばに入れて食べると実に美味しかったです。

また参加したいなと思える茅刈りでした。とても楽しかったです。

感想文　職人技や自然と造形物の美しさを学ぶ

石瀬　愛夏

10 月 26 日の茅刈り体験会と 11 月 18 日の茅出しの活動に、仲間や家族総勢 12 人で初めて参加させていただきましたバンブーハウスプロジェクト代表の石瀬と申します。

澄み渡る秋空の下、水上の紅葉や黄金色に輝くススキが広がる上ノ原茅場の美しい情景に感動しました。

茅刈り名人の雲越萬枝氏から茅の刈り方や倒れないボッチ作りの方法を教わり、鎌を研いで作業開始。初めての茅刈りは大変でしたが、大人も子どもも一緒にアート作品を作るような楽しさがあり、心地よい達成感を味わえました。

作業の合間にいただいた黒文字茶は、冷えた体に染み渡り格別でした。また、藤原地区の茅葺き屋根建築を見学し、日本とタイの葺き方の違いや伝統の技術を学ぶ貴重な機会となりました。

職人技や自然、造形物の美しさには理由があり、すべてが学びでした。伝統建築や環境保全についても新しい視点が持てる様になった貴重な体験になりました。

■2024定例活動⑦「茅出し」
–べっぴんさんの嫁入り–

報告　藤岡　和子

茅出しは、「入会の森」の冬支度です。

4 月の野焼きに始まった今年の茅場仕事も、茅を出して年納め。10 月の茅刈りイベントでは、まだ青み多いススキでしたが、地元茅刈り職人渡辺さんや自伐組み、青水有志が 11 月中頃まで刈り進めていくうちに、黄金色へと変わって行きました。

いよいよ嫁入りの日。この日は、寒風吹く冬型の気圧配置。都市部は晴天でしたが、赤城山が見えはじめると雪が降ってきました。積もる前に出せとばかり、到着そうそう作業を始めます。前日には、自伐林業のグループが天気予報を見て、早急に対応してくれたお陰で半分出されておりました。そのため、同じく天候が心配で、早めにつくば市を出発した平沢官衙への搬入トラックに、すぐ積むことが出来ましした。自伐組の皆様、ありがとうございます。

曳きずるボッチにどんどん積もる雪
積もればその分どんどん重くなる
寒さに負けるな
無事に「べっぴんさん(*)」を嫁に出せ

***上ノ原の茅のこと**

写真の解説
・先をつかんで一度に 2 ボッチ　・曳き出す前の結束
・湿った茅はとにかく重い　・一度に沢山出せる新兵器「橇」でも、斜面を上がるのが大変
・べっぴんさんとトラック待ち　・疲れ知らずの若者

今年の嫁入り先は、昨年に続いて茨城県つくば市の平沢官衙遺跡実物大復元建物に 600 ボッチ(3000 束)、千葉県鴨川市の「小さな地球ゆうきづか」の葺き替えプロジェクトに学生有志が刈った 150 ボッチ(750 束)です。残りの 84 ボッチ(420 束)で、広場の白樺を芯柱に『にゅう』を作りました。来年の雪融けまで、上ノ原で保管します。

写真の解説　上段左から
・今年、初挑戦した「にゅう」作り
・手探りの縛り方
・支えは「森林塾青水」の看板と白樺の木

この保管方法は、上ノ原の茅が藤原集落だけで循環していた時代のやり方です。こうして一冬保管して、春先に雪橇で運んだそうです。『にゅう』のくくり方を知っている人は、もう茅出しには来ることは叶わないので、やり方が正しいのかどうか分かりません。もっと早くから習っていたらと、悔しい気持ちが湧いてきました。でも、後悔したって仕方がありません。ともかく、『やってみる』ことも継承の一技なのかもしれません。このくくり方で良かったのかどうか、来春の雪融け後に分かります。

=山の口終い=

一年の入会仕事が無事に終えられたことを、今回お世話になった民宿『樹林』の主で、我ら入会仕事の師匠の一人であった阿部惣一郎さんの墓前にご報告いたしました。

また、宿から上ノ原へ向かう途中、茅刈り職人雲越萬枝さんのお宅を訪問し、ご挨拶とご報告を致しました。

最後に、草原の広場に鎮座おわします十二様にお神酒と山のもの・里のもの・海のものと塩と水と米をお供えし、感謝と無事と祈願をこめて北山塾長が祝詞を捧げました。

厳かに祝詞を奏上

今年、収穫した茅ボッチ

茅刈イベント	166 ボッチ	830 束
茅刈衆（地元）	412 ボッチ	2060 束
合宿	106 ボッチ	530 束
小さな地球	150 ボッチ	750 束
計	**834 ボッチ**	**4170 束**

嫁入り先

平沢官衛遺跡 復元建物（茨城県つくば市）	600 ボッチ	3000 束
ゆうきずか　古民家（千葉県鴨川市）	150 ボッチ	750 束
上ノ原「にゅう」（諏訪神社用ストック）	84 ボッチ	420 束
計	**834 ボッチ**	**4170 束**

感想文　「人の手で守る茅葺屋根」

丸山　あさひ

上ノ原で行われた茅出しの作業に参加させていただきました。普段の日常生活では味わえない貴重な体験ができたことに感謝しています。

上ノ原は雪が降っており寒さが体にしみて、茅を運ぶ作業も想像以上に重労働で、初めは「最後までできるだろうか」と少し不安になりました。しかし、作業を進めていく中で、ここにいる方々はもっと前から全て手作業で茅を刈ったり、それをまとめたりしたことを想像すると、足場の悪い草原の坂道でも何度でも行き来できるような気持ちになりました。日本の伝統ある茅葺き屋根は人の手で守られている事を改めて知りました。

慣れていない雪の中での作業は大変でしたが、とても満足度の高い活動となりました。疲労が溜まっているのにも関わらず、笑顔で活動する青水の皆様はとてもかっこよかったです。今回の茅出しを通じて、感謝の気持ちや、人と協力することの大切さを改めて実感できました。このような素晴らしい機会を提供してくださった青水の皆さんに、心からお礼を申し上げます。

■麗澤学園奥利根フィールドワーク －10 月 22 日･23 日－に参加して

日光茅ボッチの会　飯村　孝文

日光茅ボッチの会は鬼怒川上流域の栃木県日光市土呂部というところに残された小さな草原を保全するために 2013 年に設立した会です。

2014 年に森林塾青水のイベントに参加させていただいて以来のご縁になります。青水では「利根川流域連携プログラム」の一環で土呂部にも何度も出向いてくださり作業をお手伝いしていただくなど、交流を重ねてきました。

さて、麗澤学園の森林フィールドワークは麗澤中学校 1 年生を対象に上ノ原茅場周辺フィールドを利用して森林塾青水がインストラクターとして継続して受け入れている事業です。青水が用意したプログラムは、自然と暮らしを知る･自然と仕事･自然を感じる、をテーマに、それぞれ古民家見学、茅刈り体験、森の散策などが用意されています。事前に副塾長の藤岡さんからお送りいただいた資料でコンセプトも明快です。

当会でも数年前からインストラクターのお手伝いとして数名が参加させていただいており、今年は私と当会会員の立原さんの二人が参加しました。

■10 月 22 日　準備/下見

お昼前に上ノ原に到着しました。立原さんは初めての上ノ原で、栃木県では見られない広大で開放的なススキの原に感動しているようでした。天気はまずまずですが、本番の明日は小雨予報、天気が気になります。

目隠しをしてロープの触感だけで森の中を歩く「目隠しトレール」のためのロープ張り、茅刈りのための鎌研ぎ、散策ルートの草刈りなど、皆さん慣れた手つきで要領よく着々と準備を進め、明日の本番の対応などを打合せします。

■10 月 23 日　フィールドワーク当日

いよいよ、フィールドワーク当日。早朝、宿の窓から見る空には青空も見え、予報に反して天気が好転するのではという淡い期待もよぎります。

生徒たちが宿泊しているホテルから、生徒と共にバスにそれぞれ同乗し、5 台のバスで予定していた順に生徒を案内します。一台のバスに一クラスの生徒が乗車していて、そこにそれぞれ 2-3 名のインストラクターが引率して案内します。五クラスが重ならないように良く考えられたプログラムです。

上ノ原に到着する頃にはポツポツと雨が降り始めています。でもバスから初めて上ノ原の茅場に降り立った生徒たちの眼は新世界にでも降り立ったように輝いている

ように見えます。全員雨具を着用し、我々のクラスはまず森に向かいます。

生徒たちは森の入口のウワミズザクラの幹に残ったクマの爪痕やクマ棚をしげしげと見つめます。この木に登って実を食べているクマの姿を空想しているようにも見えます。

森に入り、早速目隠しトレイルに向かいます。はじめは見えないことへの恐怖感からか足がすくんでしまう生徒が多かったものの、徐々に友だちの声や手に伝わるロープや足下の感触などをうまく使って楽しそうにゴールを目指すようになってきました。中には「もう一回行ってみます」という生徒もいて視覚に大きく頼っていたことを実感したようです。

森の至る所に落ちているミズナラのドングリを「ドングリを食べるイベリコ豚の気持ちになってみよう」と希望者はかじってみるよう促しました。かじった生徒たちはその渋さに驚きながらも、渋さはタンニンという成分でブタやイノシシは食べられるようにする成分が唾液に含まれていると説明したところ、その渋さを克服できる動物がいることの不思議さやドングリの大切さを実感してくれたようでした。また、オオバクロモジの甘い香りやサンショウの爽やかな香りをはしゃぎながら楽しんでくれました。

気がつくと生徒達の足下はびっしょりと濡れていましたが、元気いっぱい大はしゃぎする姿が印象的でした。

強くはないものの雨がけっこう降ってきました。このため急遽、茅刈りの代わりに自然素材を使ったクラフト教室をやることとなり、生徒たちは歩きながらドングリや枯れ枝、落ち葉など、クラフト教室用の素材を思い思いに集め、手にしています。

茅刈りができなかったので、初代塾長の清水さんからお聞きしたことがある藤原地域で伝わる茅箸の話をしました。祭事など神聖な場で使われる茅箸をサンプルに一つ作ってみたところ、何人かの生徒が「私も作る」、「お弁当で使ってみる」と嬉しい反応がありました。

雲越家住宅では、囲炉裏の煙がたちこめる家の中に驚きながらも、煙があるから茅葺き屋根でも長く使うことができることなど、自然と共にあった昔の暮らしに想いを馳せるようにうなずく生徒もいました。近くに落ちていた里栗の大きさにびっくりしながらも住まいに近いところに食料になる栗の木を植えた先人達の暮らしぶりも想像したようです。

そして、最後は場所を移して自然素材を使ったクラフト教室です。天候の急変でも臨機応変に対応できる青水のイベント術は大いに参考になります。

北山塾長が用意してくれた広いホールにはたくさんのクルーガンやノコギリ、輪切りにした木材や長い枝などが広げられています。生徒たちは用意された材料や、上ノ原で採ってきた材料などを思い思いに手にして、ブルーシートの上に散っていきます。

ドングリを立体的に組み合わせた造形や、木の枝を複雑に組み合わせたオブジェ風のものなど、木の実や枝の自然の造形を実に巧みに組み合わせて創造力を発揮します。

今回、雨天のため茅刈り体験はできませんでしたが、帰路、自ら作ったクラフトを大切そうに手にバスに乗り込む生徒たちの顔を見て、上ノ原の森を存分に歩き、古民家見学やクラフト教室などを通し、自然の中で過ごす心地よさ楽しさ、さらに美しさや奥深さ、そして人と自然との関わりあいなど、将来を担う生徒たちの心に何らかの印象が残されたのではないかと感じました。

森で拾ったドングリやマツボックリなどを使った素晴らしい作品の数々

■小貝川と菅生沼の野焼き

報告　稲　貴夫

◆小貝川の野焼き－火入れは１週間延期にー

１月 25 日土曜日は、地元常総市の「自然友の会」が主催する小貝川の野焼きの日。前日からの関東地方の天気は予報では曇りでしたが、雨雲レーダーをみると所々筋状の雨雲が広がり、常総市も未明の時間帯に薄い雨雲が通り抜けるようです。移動に利用したつくばエキスプレスの車窓からも、雨が上がったばかりの様子が見て取れましたが、午前９時には予定通り、青水からの 11 名を含む百人近い参加者は堤防の上にある広場に集合しました。開会式では、的場会長の挨拶、行政や大学関係等の参加者紹介のあと、小幡さんから今日は作業のみで、火入れは一週間延期すると報告がありました。残念な気持ちもありますが、湿っていては火は燃え広がりません。また、防火帯の整備は野焼きに不可欠の作業です。

１か所目の野焼き　下は末黒野

全員、気持ちを入れ替えて、三か所ある野焼き予定地で作業に励み、最後に記念撮影して解散となりました。

そして一週間後の２月１日は、快晴微風の絶好の野焼き日和。この日の参加者は四十数名、青水からは３名のみでしたが、それぞれ、バーナーやジェットシューター、燃え残り対応のための刈払機やレーキを手に取り、三か所の区域に順に火を入れました。最初に火を入れたオギの生い茂る区域では、処々大きく火があがり、燃え残りはわずか。他の区域もほぼ満遍なく火が入り、一週間がかりの野焼きを無事に終了しました。

上は２か所目、下は３か所目

尚、３月 30 日（日）９時半より自然友の会の主催で、ヒメアマナを中心とする観察会が開かれます。

参加を希望される方は、青水事務局・稲までご一報下さい。

◆菅生沼の野焼き

１月 26 日には、菅生沼の野焼きが行われました。前日の雨で延期となった小貝川の翌日で、その後は好天だったので絶好の野焼き日和と思われました。

この日、青水からは 11 名が参加しましたが、見学者も含めるとむ総勢は二百名近くいそうで、集合場所のふれあい広場は賑やかになりました。

開会式では、まず主催者である茨城県自然博物館の横山館長が挨拶。来賓の挨拶や紹介に続いて、野焼きの説明がありました。今年は、上流側にある柳の並木の部分にも火を入れるため、防火帯の作業は例年より時間がかかりそうですが、ボランティアの数は十分。作業の説明が終わると、刈払機から先に、オギ原の周囲の防火帯（5 メートル幅）づくりに取り掛かり、続いて、十文字の形に仮設防火帯（2 メートル幅）を切ってゆきました。約１時間ほどで柳の木の部分も含めて作業を終了。その後、点火とジェットシューター要員を除き、関係者は安全な地点に退いて野焼きを見守りました。

今年は、柳の並木にも火入れ

仮設防火帯で４箇所に区切られたオギ原のエリアは、下流の岸側より反時計回りに火を入れて行きましたが、やはりまだ、オギ自体が湿っているようで、思ったほど炎は伝わってゆきませんでした。燃え残った箇所については、博物館関係者及び有志が残って刈払機で燃え残ったオギを倒し、燃料の密度を上げてから改めて火を入れて、今年の野焼きは無事に終了しました。

第６２回社会貢献者表彰を受賞

－３代塾長揃踏みで式典に出席－

報告　草野　洋

一昨年の茅刈りの頃、日光茅ボッチの会代表の飯村さんから「社会貢献者表彰（茅ボッチの会は第５８回で受賞）というのがあるので森林塾青水を推薦したいのですがよろしいでしょうか」との打診を受け、北山塾長が公益法人社会貢献支援財団に申請していたところ、昨年８月栄誉ある賞の受賞決定の通知を受け取りました。財団の担当者が 2024 年の野焼きを視察されて我々の活動がこの栄誉にふさわしいかどうか見ていただき、当方としては好印象を得たと思ってはいたもののこの朗報に小躍りして、推薦していただいた飯村さんに感謝･感謝･感謝でした。

この表彰は、公益財団法人社会貢献支援財団が人びとや社会のためにつくされた方を表彰し、日本財団賞が贈られるもので、年２回行われます。対象者は広く社会の各分野において、社会と人々の安寧と幸福のために尽くし、顕著な功績を挙げながら報われる機会の少なかった方々を対象としています。候補者は、自薦他薦を問わず広く一般に公募され、年齢・職業・性別・信条・国籍などによる差別はありません。そして表彰対象者には、賞状及び日本財団賞（賞金）が贈られます。

さて、第 62 回の表彰式は昨年末、12 月 1、2 日に「帝国ホテル東京」で挙行されました。推薦された団体・個人は 200 以上、そのうち一審査に 60，最終受賞者は 30 団体で、うち、自然系が 3 団体、そのほかはほとんどが福祉系でした。

式には１団体４人まで出席（宿泊を含む）出来ます。さて誰を・・・・、現塾長は当然として、幹事会で若手幹事から次代を託す若きエースの藤岡和子副塾長が指名され、ちょうど 20 周年記念の年でもあり、初代･2 代･3 代塾長の揃踏みでという事になったのですが、晴れがましいところは苦手な上に､会場を聞いて怖気づき、一旦は辞退したものの、清水さんの揃踏みで栄誉を受けようとの提案もあって２代目の私も出席することになりました。

初日の受賞者懇談会で藤岡副塾長が青水の活動を紹介

初日の受賞者懇談会では、各団体がそれぞれの活動を１分間で自己紹介するのですが、所用で遅れてくる北山塾長に代わり藤岡さんが飲水思源を合言葉に、茅場の再生・保全に取り組む意義や成果を堂々と語ってくれた時は、思わず涙ぐみました。

その後、夕食会が行われ帝国ホテルのフランス料理をおいしくいただきました。19 時に解散後、３人で当ホテルのバーを冒険しましたが場違いな雰囲気にお酒を味あう余裕はなく、その後合流した北山さんと有楽町の居酒屋で飲みなおしました。

帝国ホテルで一夜を過ごし、朝食は皇居前広場と日比谷公園が眺望できるヒュッフェで大満足の朝食を済ませた後、朝 10 時からの式典に臨みました。

式典は、堂々の入賞者入場で始まり、安倍昭恵会長挨拶、表彰状授与、受賞者代表謝辞、笹川陽平日本財団会長の祝辞が続き、内館牧子選考委員長の乾杯で祝賀会（昼食会）となりました。

三代塾長の揃い踏み

祝賀会では各団体のビデオ紹介や佐藤ひらりさんの澄みきった歌声とピアノ演奏の記念コンサートが花を添えました。

今回の表彰は上ノ原着手 20 年を迎えた塾にとって、利根川源流の目立たないところで地道に茅場の再生・保全活動を継続したことが認められという、大変うれしい吉事となりました。初代塾長清水さん、3 代目北山さん、そして私にとっても塾長としてその一端を担ったことに誇りを感じています。

これも会員の皆様や藤原集落の皆さん、みなかみ町役場の献身的なご協力の賜物です。改めて皆様に心から御礼申し上げますとともにこれからの森林塾青水へのご協力をお願いいたします。

表彰式の様子は､下記のサイトからご覧頂けます。
第 62 回 社会貢献者表彰式典 ： 公益財団法人 社会貢献支援財団

「こもんずの広場」第５回

こもんずの広場「日替わり商店」は、川端顧問による越中高岡万葉一人旅日記の後編（完結編）です。一人旅ならではの意外な展開もお楽しみ下さい。引き続き「出店者」大募集中です!!　楽しいネタをお待ちしています（笹岡）

■川端英雄「万葉の故地　高岡」（後編）

ふもとの高岡万葉歴史館で、「大分時間がかかるから帰ってもいいよ」と告げて、車を降りる。何時ごろ出られますか？また、お迎えに来ますからと、良い鴨を見つけたとのニュアンスが響く。

坂本信幸館長の越中万葉の解説を読んで、ここに来たいと思っていた高岡市万葉歴史館。玄関の反対側で車を降りたため、広大な歴史館の周囲を一巡りする羽目に。竹藪などが世俗を遮っているのも、面白い。

収蔵物はともかく、屋上から立山連峰が見えるとのことで階段をエッチラコッチラ登る。当然、雲がかかっていては場所を代えても見えないものは見えない。しかし、山の傾斜面を建物にとり込んだ４階建の歴史館は、風景に溶け込んでいて屋上にいることを意識させない。設計者は誰だろう？　館長、設計者、展示物が同じベクトルなのはすばらしい。

迎えに来たタクシーで平野部まで下り、１３時に駅でと再会を約して陽射しのきつい中を歩き始める。越中国分寺跡に何時建てたか、今にも崩れ落ちそうな堂宇が。鄙にふさわしくない衣装を身につけた、うら若き２人連れの女性に道を聞く。勝興寺はここを行けば良い？さんざめきながら、そうだと頷く。意外にしっかりしたまともな対応と衣装のアンバランスに内心驚く。

国庁跡に建つ勝興寺の本堂は、屋根を支える斗栱（ときょう）の間に鬼がいるとのこと。探すも見えず。カメラの望遠を利用してやっと見つける。普通には気づかないホントに小さな天邪鬼（あまのじゃく）。この近くに咲く堅香子（かたかご）（カタクリの花）は、高岡市の花だそう。国主館跡を横目に過ぎる。

【奈呉の浦】

・伏木駅で先ほどのタクシーを呼び、新湊のきっときと市場へ。ここで、残念そうなタクシーとお別れする。

【放生津八幡宮と奈呉の浦】

市場からほど近い、宮と浦の地続き２カ所。放生津のお宮に、東京理科大工学部建築学科提供の「奉納　算額（建築学　構造力学）」として、世界初の炭素繊維製紙の絵馬と称する算額が飾られている。はて、大伴家持勧請のこの宮と理科大はどのようなご縁なのか？難しい算式が描かれているだけで、そのいわれについては無言。

【奈呉の浦】

市場近くの、家持が“東風（あゆ）を疾（いた）み奈呉の浦廻（うらみ）に寄する波・・・・”と詠った奈呉の浦も、今はコンクリート塀の内。石碑だけが所在無げにポツンと立っている。（写真・右）

【きっときと市場】

もう２時、おなかが空いた。きっときと（新鮮を意味する富山の方言）市場に戻って昼飯を。閉店間際で客は誰もいないが、店主は愛想よくどうぞと。とれたて海鮮のお寿司とズワイガニ（ちょっと季節外れだなと思いながら）でぬる燗を１本。

【神楽橋】

ほろ酔い気分で、建物が邪魔して見えない奈呉の浦海岸に沿ってブラブラ４０分ほど。

欄干にステンドグラスを嵌めた神楽橋を渡る。なんでも、東京駅京葉線への階段脇にあるステンドグラスの一部を書いている作家の作品だとか。建設大臣表彰の“手づくり郷土賞”が掲額されていた。

【街中】

「ぶりかにバス」との表示のバス停留所。表具（掛軸・襖障子・屏風衝立と書いた旗、畳）屋。アレッと思う駅名「第一イン新湊クロスベイ前」。赤い顔の猫やブーちゃんの黄色い顔を電車のフロントに大きく描く現代的センスの、その名も万葉線。新旧取り混ぜての高岡市街地を抜けて終点高岡駅。万葉線、あいの風とやま鉄道線、ＪＲ城端線が集まる結構な駅。

【３日目】

万葉とは関係ない街中のウオーキングだったので省略しますが、金屋町（高岡銅器・鋳物の街）、山町筋（土蔵造りと豪華な山車が自慢）、国宝・瑞龍寺（加賀前田家の城郭並み禅宗寺院　写真・上）を歩きました。

新幹線に間に合わなくなりそうで、信号待ちしていた自家用車にいきなり、新高岡まで乗せてと頼めば嫌な顔一つせず、見知らぬ客を運んでくれた女性。落ち着いた文化グレードの高い、人情味ある高岡でした。

■藤原だより
「昨年と打って変わり、藤原は大雪に」
塾長　北山　郁人

今年は、テレビのニュースでもよく報じられている通り、藤原は大雪に見舞われております。2 月 4 日あたりからの寒波で一気に 130cm ほど積雪が増え、最大で 270cm まで積もりました。気温も－10℃にまでさがりました。－10℃になると鼻から息を吸い込むと鼻毛が凍る感覚があります。
またこれからも寒波が来る予報となっているため、気の抜けない冬になりそうです。

森林塾青水 20 周年記念行事のご案内

森林塾青水が上ノ原の草原再生に取り組んでより、今年は丁度満 20 年にあたります。

そこで、20 周年記念のシンポジウムや感謝の集いを、恒例の野焼き行事に併せて、4 月 26 日に開催することと致しました。

大勢の皆様にご参加いただきたく、会場及び日程について下記の通りお知らせ致します。

会　場

「みなかみ高原ホテル２００」
〒379-1721 群馬県利根郡みなかみ町藤原 6152-1

日　時

令和７年４月２６日（土）午後 2 時半～午後 8 時半

内　容

第一部　報告会

「２０年の振り返り」
塾　長　北山郁人　副塾長　藤岡和子
「上ノ原の植物調査」
小幡和夫(茨城県霞ケ浦環境科学センター)

第二部　２０周年記念講演・シンポジウム

記念講演「気候変動と上ノ原の保全」(仮題)
西廣　淳(国立環境研究所気候変動適応センター)
シンポジウム「上ノ原の未来に向けて」
増井太樹(コーディネーター・阿蘇グリーンストック)
朱宮丈晴(日本自然保護協会)
町田　茂(町田工業会長)
北山郁人(森林塾青水塾長)

第三部　懇親会「感謝の集い」

地元の皆様をお招きして開催します。

その他

参加者に記念誌『茅風　森林塾青水の 20 年』を贈呈
野焼きは記念行事の前後（26・27 日)に実施します

参加申し込み

会員･会友の皆様には、別途メール等で、参加方法などご案内いたします。20 年の節目を皆さんと一緒に迎えられることを楽しみにしています！

森林塾青水　幹事一同

編集後記
『茅風』No. 74 号をお届けします。
上ノ原の野焼きが 2004 年 4 月 18 日に復活してから、丁度 20 年が経ちました。「茅風通信 9 号」に、その時の模様が報告されていました。古老ヒアリングの席で、かつての火入れの話を聞いた当時の清水塾長が、復活への期待を胸に宿したことが発端でした。しかし、40 数年ぶりですから、様々な困難がありました。復活の裏には、地元や町役場をはじめ、様々な関係者の理解と協力があったことを、同通信は綴っています。そうした歩みに学びながら、20 周年を迎えたいと思います。(稲)